

走行異常 2 例であった。

12. 膵全摘 2 例の経験

(社会保険山梨病院外科)

山下由起子・奥島 憲彦・上田 哲哉・
野口 友義・小沢 俊総・草野 佐

(同病理) 小俣 好作

我々は、最近 1 年間に、膵切除 9 例を経験したので、膵全摘 2 例を中心に若干の考察を加え報告します。症例 1 は、膵頭部癌で、慢性膵炎合併例でした。症例 2 は、肺転移のある膵全体肉腫で、症状軽減のため膵全摘施行しました。膵癌の術式選択に関しては、議論の多いところですが、予後成績がまだまだ思わしくない現在、膵全摘も含めて、積極的切除の方向が、望まれますが、何よりも超音波検査等による早期発見に努めなければならぬと思います。

13. 急性膵臓壊死手術症例の検討

(川崎胃腸病院)

大森 尚文・戸田 一寿・矢野 征多・
山内 大三・松尾 成久

昭和56年度の総入院数は877例であり、内急性膵炎並びに慢性膵炎急性増悪の入院症例は29例あり、4例に開腹手術が行なわれている。その4例すべてがアルコール多飲者であり1例が脂肪壊死、3例が出血壊死であった。多性膵炎の手術適応については、疼痛の持続、腹部所見の高度広範化、腸管麻痺の回復不良又は増強その他種々の因子が挙げられているが、刻々と変化する腹部症状、単純X線写真、超音波検査、生化学検査などを検討し緊急手術の対象症例を決めている。

14. 伊豆七島における内視鏡胃集検の検診成績

(消化器内科) 栗原 毅・丸山 正隆

(東京顕微鏡院) 氏井 重幸

昭和45年より伊豆七島の職域成人病ドックの一環として内視鏡検査を延1,618名に施行して来たので結果を報告した。胃潰瘍114例、十二指腸潰瘍98例、胃癌2例、ポリープ63例、腸上皮化生36例、静脈瘤2例を発見した。内視鏡検診そのものにはまだいろいろな問題点が含まれているが、発見した2例の早期胃癌例など見ると内視鏡検診の意味は極めて大きい。

15. 食道浸潤噴門癌 (CE, CME, CEM) におけるリンパ節転移の検討

(湯河原胃腸病院) 長谷川英美

(消化器外科) 遠藤 光夫・鈴木 博孝

消化器病センターにおける食道浸潤噴門癌(1976~1980)開胸60例について検討し、胸腔内リンパ

節転移が食道の浸潤距離、食道の浸潤範囲、癌腫の大きさ、深達度、stage と関係することが分かった。この結果は開胸手術の指標になるものと考えられる。

16. 当センターにおける早期胃癌の検討

(防府消化器病センター)

杉山 明德・勝呂 衛・渡辺 毅・
白石 守男・五十嵐達紀・戸田 智博・
南園 義一・長崎 進

防府消化器病センターが昭和41年に開設して以来16年が経過したが、その内で、この10年間に経験した微小胃癌13例について臨床的検討を行なった。術前に診断しえた例が8例あり、しえなかった例が5例あった。診断しえた8例をもう少しわしく見ると、X線検査にて存在診断すらかず、内視鏡検査でわかった例が2例、X線検査で存在診断のみしえた例が4例、X線検査、内視鏡検査ともに質的診断しえた例が2例であった。

17. 最近経験せる Dieulafoy 潰瘍の 1 治験例について

(植竹病院)

松本 光司・平井 真実・植竹 正紀・
高橋 武宜・島倉 康守・竹内 章・
植竹 光一

我々は、長期にわたる頻回の下血を主訴とする45歳の男性に対し、胃X線及び胃内視鏡を施行し、胃体上部の微小潰瘍を発見した。これを Dieulafoy 潰瘍と診断し、これに対して従来行なわれて来たように、胃垂全剝術を施行した。しかしながら、手術後の見解として、消化性潰瘍とその本質を異にする本症例では、垂全剝術を行なわなくとも、病変部の部分切除にて、充分治癒しうるものと考えられる。

18. 腸管囊腫様気腫の 1 例

(谷津保健病院外科)

新井 稔明・本多 弘・平山 芳文・
朝戸 末男・糟谷 忍・御子柴幸男

(抄録なし)

19. 日本住血吸虫症と思われる回盲部狭窄の 1 症例

(甲府宮川病院) 島田 幸男・宮川 晋爾

(甲府共立病院病理) 畑 日出夫

(消化器外科) 椋棒 豊

(抄録なし)

20. 当院における閉鎖孔ヘルニア 5 例の治験例

(加納岩病院) 中迫 利明・吉田 経雄

閉鎖孔ヘルニアは比較的稀な疾患とされ現在まで